



| | |
|--------------|---|
| Title | インタビュー 磯野富士子先生と『オールドス口碑集』 (2000年12月1日 大阪外国語大学) |
| Author(s) | 芝山, 豊 |
| Citation | モンゴル研究. 2008, 25, p. 46-53 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/102352 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《資 料》

インタビュー

磯野富士子先生と『オルドス口碑集』

(2000年12月1日 大阪外国語大学)

2000年12月1日、磯野富士子先生は、ご自身が編集されたデロワ・ホトクトの回想録などの書籍の他、大切にしておられたオーエン・ラティモアゆかりの品々を旧大阪外国大学図書館に寄贈された。その中には、ラティモアが徳王から拝領した品々や、ハズルンドとラティモアの友情の証で、磯野先生が『図書』に書かれたニルギトマ王女とラティモアのパリでの再会のエピソードに登場する飾り鉤も含まれている。これらの品は、現在、大阪大学箕面キャンパス内の大阪大学付属図書館に所蔵され、希望者に公開されている。

同じ日、磯野富士子先生は、大阪外国語大学のリレー講義に、ゲストとして参加して下さった。

以下は、インタビュー形式で行われた講義の録音テープを起こして作成したテキストから、主に、『オルドス口碑集』に関する部分を抜き出したものである。

当日の講義担当で聞き手を務めた芝山の発言は適宜簡略化したが、磯野先生の発言部分は改行、句読点を入れたのみで、改変していない。但し、読者の便宜のため、()内に文意を補う補足情報を入れ、若干の注を付した。

この対談での磯野先生の発言は、一見、すべて既知の情報の繰り返しのように思われるかも知れないが、微妙なニュアンスも含め、先生とその業績を理解するために重要な情報が含まれている。(芝山 豊)

(前略)

芝山 ……では、どうして先生がモンゴルを研究なさるようになったかのお話を。

磯野 全く困ることは、私はモンゴルに縁ができようとは、お嫁にやられるまで全然知らなかった、思いもしなかったんですよ。女学校時代には地理と歴史が、殊に東洋史が嫌いというよりも、もう興味がないというか、関心がなかった。でも日本女子大の附属高等女学校でしたから、勉強しなくてもね、追い出される心配なかったんです。だから、好きなことだけしていれば良かったんで、そして、だから、モンゴルに、主人が結婚して1年半くらいの時に、急に江上波夫先生がうちいらして、長広舌をおふるいになって、先生がお歸りになったら、(主人が)「蒙古に行く」って

言い出したんですよね。それで、私はその頃、蒙古なんてどういう所にあるのか、そう定かではなかったし。まあ、それだから全然自分で選んだ道じゃなかったんです。それで、本当にモンゴルに行っても、家族(論)にしても、みんな潜りなんです、私。正式に免状といふかなんとか、持っているのは英語、英文学だけなんです。他には何



大阪外国語大学 講義にて

の資格もない。それで、まあ、モンゴルに連れて行かれまして、で、今の方はびっくりなさるかもしれないけれど、その主人が行くって決めた時に、「君どうする？」って聞かれた覚えがないですよ。ね。だから、勝手に決めて……。だから、そして、しかも行くまでに時間が短いし、モンゴル語なんてのは、全然知らなかったし、それでその昔の、あの、今は小沢さんの『モンゴル語4週間』になってますけれども、昔は、精松先生の『蒙古語4週間』というのをまず買って、あれは、4週間にただちぎってあるだけなの。だから、たいしてあんまり、そんなこと（いっちゃいけないけど）。それに引っ越しもしなくちゃ、むしろ行くのに準備しなくちゃならないでしょう。家のこともね。それからその中国というのがあるけど、中国でしょう。それも、その準備もなしにモンゴルに行っちゃったわけなんですね。勿論、内蒙ですけど。その頃は、今、芝山先生がおっしゃったように、その日本の軍が、アジア、あの頃北の方ですけどね、中国や満州国、蒙古聯合自治政府というのも、日本の、まあ、蒙古自治政府だったけど、結局、日本の軍人たちが行って、そして、傀儡、徳王は、本当は、傀儡になりたくなかったんだけど、他にしかたがなくて、日本と、言うなりに（ではなく）、なるべく内輪に、協力の度をなるべく少なくしようとしていたんだけど、結局、あの孤立無援で……。もちろん、皆さん、「旗」というのご存知でしょ。ホショーね。本当のノヨンね、王侯だの、それから本物のゲゲン、本物っていうか、活仏だの、実際に機能していた時代なんですね。だからⅢ. ナツァグドルジの、つまり今のモンゴル国のもうシニアな学者たちでも、実際にそういう社会が機能していた時代というのは、よく覚えていないとか、知らないとかっていうので、そういう点で、ある点で、そのモンゴルの昔の社会っていうのを知らない、（知っている）人がもうほとんどいなくなっている時に、まあ、モンゴルのウ

ジムチンという（*芝山に向かって）ちょっと説明して。

興安嶺のこっち側で、一番あの、そのころの外蒙に接した、あそこが一番古い慣習が残っているというので、行ったのですけど。それで、まあ『冬のモンゴル』（で書いた）みたいに、およそ冒険的じゃなくて、そして寒いのが大嫌いだったのに、ラクダの車で、3晩4日、野宿して、行かなきゃ



『冬のモンゴル』の頃の磯野御夫妻

ならない羽目になっちゃったんです。

（芝山さんが）あの人形のことまで覚えてらっしゃるなら、（人形の）レナを連れて来れば良かったわね。なにしろ、幌つきの……。『冬のモンゴル』に書いてあるから繰り返すことありませんけどですけどね。それで、まあやっと、ウジムチンに着いたけど、そこでお世話になった方は「旗の顧問」っていうと、みんな知らない人は、モンゴルのこと知らない人は、「キノコ？」っていうんですけどね。旗って、ほら、あの昔、説明しなくていい？（*「大丈夫です」の答）その旗のいろんな所に、みんな日本軍関係の、特務機関といって分かります？（*「分かるでしょう。」の答）特務機関の人が顧問になって入っていたんですよ。それで、あの蒙軍の、ウジムチンにいたところにも、軍の、蒙軍の顧問として、結局、日本の側か

ら、その正式に(法的にはないけれど)、実質的にはコントロールしていたんですね、その各旗に王侯が、その頃のウジムチンのノヨンはまだ子どもだったけれども、子どもじゃなくても、方々にお目付け役みたいなのがついて、それで監督して、日本の(※一語不明)というか、都合のいいようにやっていたわけなんですね、それで我々も行けたわけなんですね。全体としてビザがどうのこうのという時期じゃなかったけども。

(中略)

芝山 モスタールト神父様のことをお話し下さいますか。

磯野 それはね、モスタールト神父様は、あの始めにモンゴルに行った時に、北京をとっていくわけでしょ。その時に、あれは服部(四郎)先生、江上(波夫)先生か、ともかくそのモスタールト神父様がいらっしゃるといってね、まあ、私はモスタールト先生もオルドスも、全然オルドスなんてどこにあるのかも知らなかったわけだけど、北京で少しおじの所にいた時に、小林さんて、考古学やっていらした方がいらして(小林知生、南山大学名誉教授)、その方がベル・モスタールトの所に連れて行ってくださったの。モスタールト神父様は。

日本の特務機関の中だったと思うんですね、あの方は、かなり有力な方が、そして、こっちのモンゴルとか研究してらした方、トルコが主だったかしら、その方が、関東軍と掛け合って、(モスタールト神父様は)ベルギーの方で、敵国でしょ、ベルギーは。だから他の人が抑留というのか、北京の中の一ヶ所に集められてそこから出られなかったんですよ。それで、モスタールト神父様のことを知っていた方が「スミ」さんて、驚を見られて書いた方、(驚見東観愛知教育大名誉教授、

2008年没)、やっと後で分かったんですけどね、その方が、関東軍の、占領日本軍と交渉して下さって、それで、あの北京のカトリック教会の中の神父様たちのいらっしゃったところの、小さな、8畳もなかったんじゃないかしら、部屋に、そこで研究が続けられるように計らってくれて、それで、我々はもう、モスタールト神父様の所に外から来る人も、別にあんまり邪魔もされないでいかれたんです。

それで、その小林さんという考古学の方が最初に連れて行って下さったんです。我々がこれからモンゴルに行くって言ったものすごく喜んで下さって、それで(訳書で)ご覧になったかどうか知らないけど、そこで、まるでパンフレットでも渡すようにオルドス辞典ね、フランス語とオルドス語のこんなでかいのよね、それを2冊と、それとオルドス口碑集ってというの、一抱えあるでしょ、あれを下さった。本当、ボンと下さっちゃった。まだ何も始めてないのに。

それでこっちはモンゴル語も何も知らないし、行っちゃったもんですからね。それでフフホトに行ってから、私はモンゴル語をやるために、オルドス口碑集を読んで、訳して、まあ、訳すというよりも、始めは忘れちゃわないように書いていったんですよ。それで、随分モンゴル語の助けに、まあオルドス方言ですからね、ハルハとかなり違うところありましたけれども。またモスタールト神父様は言語学の方が専門でいらっしゃったから、本当の専門は宣教師だったんでしょうけれども、(言語を)研究をしてらしたもんだから、モンゴルのその頃はテープレコーダなんかもちろんない、19世紀の終わり頃から20世紀の始めにかけてオルドスに入っていまして¹⁾、それでその聞いた言葉を、特別な、普通のローマ字じゃなくて、言語学者だから、こう、普通のフォニームね、何ていったっけ、普通の言葉で書けば同じ字に入るところでも、その前後によって多少音が違ってく

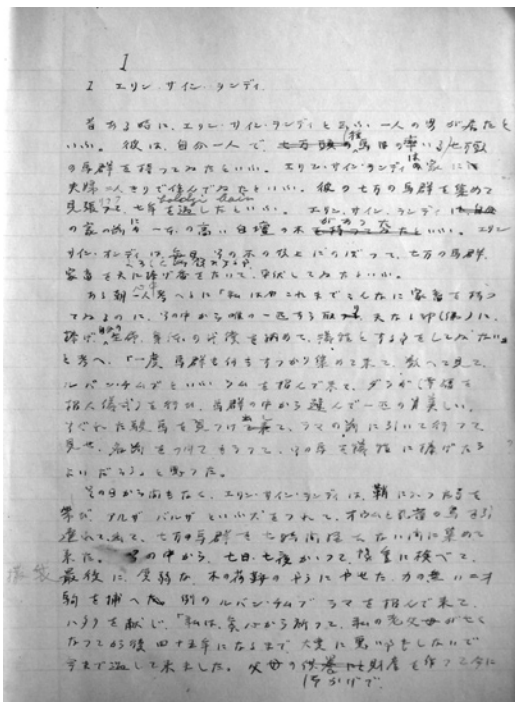
るでしょ。同じ「アー」っていうんでも。それを詳細に分けて書いてあるから、実は、それから字引をお作りになったから、転写の、(方法を)見つけるのを大変だったんですって。それでその字引がオルドス語を転写したのと、フランス語訳なんですよね、訳って。そのオルドス語をフランス語で字引に作ってあるから、私はその頃フランス語は全然知らなかったっていいってもいいくらい。それでオルドス語をオルドス辞典からフランス語を、単語ですからね、引いて、フランス語から仏和を引いて二重でしょ。それで、最初、説話の最初が、エリン サイン オンディ ゲジ ネッグ フン バイサングリ、その一行を、それこそ、蘭学事始じゃないけど二三日かかって、やっと、昔、エリン サイン オンディって人がいたんだと納得するまで二三日はかかって。それは厚和(フフホト)にいる時に始めて、それはその今の飛行機じゃないから、全部でっかいオルドス口碑集も

辞書も全部ウジムチンまで持っていかれたんですよ。厚和でもそれを続けていて、奥でもやって、それで、日本語と似ているから、ある程度ね、わりと終わりになってから速くなったんですけどね。それが私のモンゴル語。だからモンゴル語の学校行ったこともないし、だからあの精松先生の4週間と。

それから、まあ、奥に行ってモンゴルの人達と実に惜しいと思うのはね。

通訳を使ったインタビューっていうのは、我々はあるまり信用しないし、ラティモアも、後で、そりゃまったくそうだと行ってね。ラティモアがフィッシュスキンの・タタル('Fishskin Tatars')ってね、何だ、黒竜江の今の中国のモンゴル地帯の一番北で黒竜江のそばにシャケの皮かなんかで着るものや何かを作っていた部族がいるんですね。そこの調査に、彼は中国語の方が先に(学習)してたから、中国語は(よくできる)。そしてその彼の時代はフィッシュスキンの・タタルの人たちも中国語は分かる、それで中国語でインタビューするとあなたとは話しが通じるって、それで、この間どっかの国の人が来たけど、いいかげん気に入るようなことを言っておいたよというようなわけだね。それは確かに調査っていうこと分らないじゃない。現地調査っていうものがね、それで警戒するでしょ。一番あれなの、税をとるためじゃないかと。それはもっともなことなんですけどね。それは、後で聞いたんだけど、我々は通訳を通した現地調査っていうのは、(通訳は)あてにならないんで、こっちがモンゴル語ができなくても、ともかくできるだけモンゴル語で。

で、殊に、その頃、日本人がいかなかったことはあっても、その頃、日本語できる人というのはやっぱり大東亜共栄圏的な人だからどんな風に通訳するか分かんないじゃない。それだからもっと長くいられたら、もうちょっとちゃんとした調査ができたんだと思うんですけど。それで結局、半年



『オルドス口碑集』翻訳ノート1頁目

ちょっと、半年ぐらいの間だったから、本当に『冬のモンゴル』なんてものは、あれは調査記録じゃなくて、日記が、幸いそのモスタールト神父様や、グロータス神父様のおかげで、手元に戻ったんですのよね。引き揚げの時は、書いたもの一切持ってっちゃいけなかったから。それで、あの、だから、あれは全然学術的なものじゃないから、そのおつもりで読んでいただきたいんですけど。ただ、まあ、ノヨンだとか、活仏なんかが、どんな風になってやってたかっていう一端はね（お分りになると思う。）お正月は、あれが内蒙古でも昔ながらでやった最後のお正月だったと思うの。

（中略）

芝山 プリティッシュ・カウンスルの奨学生でイギリスに行かれて被爆者の通訳ボランティアみたいのをなさったでしょ、プリティッシュ・カウンスルが反対したにも関わらず・・。

磯野 それ、昨日話したっけ？

芝山 それはみんな知っています。婦人団体との関わりで、女性の問題も重要なのですが、先生のモチーフとしてあるのは家族の問題。古い日本の家族ですね、家族の問題と個人の問題というのは常に関心があって・・・。

磯野 （私は）被害者だったのよね。戦後になって主人の付き合いもあったし、あの結局、私自身が親との考え方がわーんと違って、そのズレが新教育で全国的になったんで、お母さんたちの。それだから、私は、旧家族制度でやりたかったことは、英文学の方だったんだけど、やれなくて、そして、とっ捕まって、お嫁にやられちゃって、それから蒙古へ連れていかれて、それから帰って来たら蒙古というものは何にも問題にならなくなっ

て、でもう行くことができなくなったでしょ、戦後すぐ、あの頃はね。

そしたら家族制度になって、それで家族制度がいかに被害を及ぼしたかということや、親子のズレがどういうものかやっているうちに家族関係論というのになっちゃって、それで女子大で家族関係論、それから社会事業大学ということで、時間講師だけどやっていて、そして、夫婦で共学、夫婦共学というも楽じゃない、どちらかが転業しなきゃならない。主人があの頃、今、筑波になった教育大学で民法やってたから、彼が廃業したら飯の食い上げでしょ。だから、転業するとしたら、私が転業しなきゃなんなかった時に、江上（波夫）先生が「モスタールトのあれはどうなりました？」とおっしゃったから、初め、あんな膨大なもの出してくれる人なかったし、「あのまんまになってますって」言ったら、「ペル・モスタールトがお元気なうちに何か出しておいた方がいいじゃないですか」って言って、ほんの一部を、東洋文庫で、平凡社の東洋文庫で出してくれて。

だけど、面白かったのはね、モスタールト神父様のフランス語訳の『オルドス口碑集』の、フランス語訳は全訳が出て、やっぱりあの同じ輔仁大学の方で出ているんですけど、要するに歌ね、ドー（歌謡）だとか、いろんな、なぞなぞとか諺、そういうのね。殊に歌は、ほとんどそのように訳せないのね、フランス語と全然違うでしょ文脈が。ところが日本語はね、かなり近く訳せたんですね、モンゴル語だからね。だからそれだけはフランス語訳よりも元に近いと思うけれど。だから、私は、転業に転業を重ねて、結局、何も虻蜂取らずで、82歳までなっちゃったわけ。

（中略）

磯野 なぜ、ラティモアのところにいたかっていうと、東京外大で坂本是忠さんが学長になった

時に、その歴史とか、何か言語じゃないことをやりに来てくれないかと、時間、非常勤じゃなくて、本当になってくれないかと来たんだけど、ラティモアをもう、決めちゃったものをちょっと見捨てるわけにはいかなかったし²⁾、もうひとつはラティモアの蔵書というものが、方々のヨーロッパの有名な図書館にどれかはあっても、ラティモアの蔵書ほど揃っているのはなかったんですね。それがいつでも自由に使えるでしょ。それで、それが大いに魅力であったし。それで、私は、初めはモンゴルの革命の頃をやるつもりだったんだけど、アンダっていうのは本当に義兄弟かしらと思った、クリエンなんて、ああいう形で遊牧がなりたったのかしらとか、やっぱりね、ちょっと母とうまくいかなかったことからつながっているのかもしれないけど、天邪鬼で、通説になっていることがあって、つい、それ本当かしらと思うと、ひっかかるというかになって、それだって、ラティモアの蔵書が揃っていたから、方々の図書館ね、大きな、主に英国とフランスだけど、一番大きな図書館に行っても、あることはあっても揃ってない。さんざん巡り歩かなきゃならないのが、こう、とれるわけでしょ。すぐそこにあるわけでしょ。それが魅力で、つつい世話に、結局、世話もすることになっちゃって。だからそういったら悪いかもしれないけど、ラティモアってのは、えらい頼りになるしっかりした人だと思ったけど、いかに世話がやけてということが分かって、私、ラティモア知らないほうがよかったかも知れない(笑)

でまあ、ラティモアがあれだし(*亡くなって)、うちもそういうこと(*ご主人の体調を考え、目白のお宅を整理されること)になったんで、家族(の研究)もモンゴル(の研究)も全部放り出して、方々しかるべきところに(それらの資料を)送りつけて、今の所(高齢者用ケア付マンション)へもっていくのは、英文学やなにかで読みたくて読めなかった、英語ばっかしじゃないの、読みたくて読

めなかった本だけ。だからこちらでも、元来、芝山さんのところへ渡して、それだけで帰るつもりだったら、運ぶのに芝山さんがこう東京へ回っていらっしゃるというので、これ幸いとばかりに、来て、もっていただいて、というわけ。まことにご期待に添えません、申し訳ないですけど、そういうちょっと変わってて、何ともかんと説明のしようのないことで、82(歳)にもなりました。

(中略)

芝山 『オールドスロ碑集』のことで、私が非常に印象に残っているのは、先生が全部綴じを剥がしてしまわれて・・・

磯野 剥がしてっていうんじゃないくて、何べんもやっているうちにボロボロになっちゃった。

芝山 ボロボロになっちゃって、それをお布団の・・・

磯野 キレもない時代で戦後でしょ。だからお嫁入りの時の布団だって、もうすでにスフ。まあ、本当の絹や木綿もなかった頃だから、それを貼って布団のように縞が入っているんだよね。いかにも布団布団している。



布団の布で綴じられた『オールドスロ碑集』

芝山 それをお使いになって大学ノートにですね、訳をビシッと書かれているわけです。その大学ノートのほんの一部が今先生お話しになったこの東洋文庫のシリーズの中に納まっているわけですね。だけど、入ってない方が多いわけですね。

磯野 10分の1くらい。

芝山 是非、全部印刷したいと思っているのですけど。

磯野 原稿というのかあの頃もちろんワープロも何もないでしょ、それでボールペンというのが出始めて、ボールペンの古いの、時がたつとにじんじゅうのよね。それでまた、私は稀代の悪筆で、あれは捨てちゃおうかと思って。

芝山 捨てちゃだめです！

磯野 そしたら、芝山さんが文学の方に興味がおありになるというので、それと芝山さんと親しくなったから、「芝山さんならいいや」と思って、送りつけちゃったわけ。

芝山 私がもらって密かに何点かだけ自分が訳したようにして出すこともできますけど・・・。

磯野 構わないわよ。

芝山 そういうことをしては磯野先生の学問に対する教えに反することになりますから。なるべくたくさんの人に知らしめて、共同で先生の原稿を起こして、なんとか出版したいと思っています。

磯野 でもね、あれはちゃんともういっぺんやってないから書きっぱなしだからね、専門家をご覧になると違っているところ、うんと、まあ、

あの仏訳とか一応は(比較検討したん)でしたけれども、本当に捨てちゃおうと思った、寸でのことで。

芝山 危ないところでした。

磯野 これもらってくれる人、送り付けるところなんかないし、ボールペンのは、にじんじゅうて字はメチャクチャだし。

まあ、でもね、あれの『オールドスロ碑集』の、これ(*東洋文庫版を手)に出た時かしら、護雅夫さんが、なんだっけ、「なんとかするほど文句が多い」っていうの書評にね、書いてくださったのよね。何だっけ、知らないほどじゃない、なんとかこういうことを言ったら、そのモンゴルの諺を使って、やりこめられるかも知れないとか。それだから、かなり面白い諺やなんかあるんですよ。わりとこう使ってましたね、あの頃は。

あの、そうか。ボーバクシというボルジギンの後裔の人がウジムチンにいたんですよ。ボーバクシって、みんな言ってましたけどね。そんな人が言ったのは、私は、やっぱり言葉わりと覚えるもんだから、モンゴル人がね、カトン(*高貴な女性へ敬称)なんてのは、それこそね、大変なカトンだと思ったら、我々も日本人で、日本人がいばっていたか知らないけど、私はカトンと呼ばれていたわけよね。それでカトンの方がバクシ(誠一先生)よりもモンゴル語がうまいって言ったからさ、私はそんなこと言っちゃダメよと言ったんだけど、そしたらそのボーバクシが「ウヌン ウグ ソンソート オールラフブル メルゲンフン ビシ」(真実を聞いて、怒るのは識者ではない)って言ったのよね。そういうふうにボーバクシだったからかもしれないけど、その頃はわりと諺みたいなのをちょいちょいと出てくるというか。それから歌のことはね、ファールンガっていう宮廷楽士みたいな人が、楽士って、歌のね、16歳で、お

正月やなんかの時にまあ、ノヨンの所のお祭りで歌うわけでしょ。そして、その人がね、なにしろね、恋歌なのよね、それを教えてもらおうとしたら、ボーバクシが、「カトンにそんな歌教えちゃいけない」って。いかにもボーバクシらしいんですけどね、ひとつ覚えたのは、(*一節を歌う)。つまり、荒地じゃない、山に生えるのは、オーランガザル、だからあの、オイラスンモドって、日本のと同じじゃないのかもしれないけど、柳の木の設定、そして、お嫁にやられてよその土地にやられるのはオヒン・フン、女、娘の設定、オヒン・フンの定めだっていうのは良かったらしいのよね、教えてもらっても怒られなかったから。

だけどころなあんまりごちゃごちゃ転業に転業で、生きてきたもんですから、あんまりお役に立てなくて申し訳ない。ただひとつその一番モンゴルの暮らしの最後の段階を見たということはね、やっぱり、III. ナツアグドルジさんなんか、実際に見たことないところを、実際に見たということは、まあ、ただね、そういう、その、いい加

減なモンゴル語だったから、今思えば、もっとやれたのに、という気が時々するけど。でも、いま、ハーマーグイ(関係ない)と思ちゃう。

(後略)

註

- 1) モスタールト神父のオールドス滞在が1906-1925であることは磯野先生自身が常に書いておられるので、ここでは多分、スクート会の宣教活動全体についてコメントしているものと思われる。
- 2) 磯野富士子先生は日本女子大、東京大学などの非常勤講師を勤めているが、専任の大学教員であったことはない。機会そのものが与えられなかったと解する人もいるようだが、この発言はご本人がそれを望まなかった部分もあったことを示している。尚、坂本是忠東京外国語大学学長の任期は昭和50年(1975)からの6年間。

(しばやま ゆたか)